

の贈呈式が11月28日、東京・赤坂プリンスホテルで行われた。選考委員を代表して辻井喬さんが「皆様に納得いただける受賞作が並んだ。活字文化は不振、不況と言われるが、内容的には決して不振でも不況でもないという実感を持つことができ、心強い」と講評。各部門の受賞者がそれぞれ喜びを語った。【齋藤由紀子】

文学・芸術部門の受賞作は『日本書史』(名古屋大学出版会)。著者の石川九楊さんは「書の一点一画の書き方と、その積み重なり方を読み解くことで、日本の知識人の精神史が読み解けるのではないかと、試みたのがこの本です。日本語は中国、朝鮮半島、

石川九楊氏



ドナルド・キーン氏



角地幸男氏



酒井邦嘉氏



小松久男氏



齋藤孝氏(いづれも岩下幸一郎写す)

受賞の6氏が喜び、抱負

毎日出版文化賞贈呈式

ベトナムとつながりながら、違う文化、言葉、文体を積み上げてきました。そういう日本語の文体が、21世紀の

積み重ねたのは、大変な苦労でしたが、それがあってこの内容が達成されたのだと思います」と、受賞作の趣旨やエピソードを紹介した。

「本の形になって通し、読んで読んだ時、毎月読んでいた作品はこんなに面白かったのかと、初めて気づきました。ささんは「本の形になって通し、読んで読んだ時、毎月読んでいた作品はこんなに面白かったのかと、初めて気づきました。」(中央公論新社)。著者の酒井邦嘉さんは「私は科学技術振興事業団で、皆さんの税金を使って研

世界に対してどういことを言えるのか、今後、考えていきたいと思っています」と、出版の意図と抱負を語った。人文・社会部門の受賞作『明治天皇』(上下巻、新潮社)の著者ドナルド・キーンさんは、「訳者の角地さんがいなかったら、日本で賞をいただくことはできなかったでしょう。また、受賞作は月刊誌の連載でしたが、書き出した時は1年と続きました。出版社はよく我慢してくれました。特別な感謝の気持ちでこの賞をいただきます」と、ユーモアで会場を沸かせながら喜びを語った。

今、進学校の高校生でも6割近くが月に一冊も本を讀みません。大量の読書で培ってきた価値観、倫理観、知識といった基盤が崩れ落ち、日本が根無し草になってしまっているのではないかと危機感を持っていきます。身体文化と言語文化の結合を、子供たちの体にしみ込ませ、伝えていきたいと思えます」と述べた。その後、齋藤さんの呼びかけで会場の全員が起立し、声をそろえて、「白浪五人男」(河竹黙阿弥)の一節を朗読した。

もちろん、毎月面白かったのですが、まとめて読む迫力の違いというのでしょうか、キーンさんの構想の大きさをしみじみ感じました」と賞辞を贈った。

企画部門の受賞作は『岩波イスラーム辞典』(岩波書店)。編者の同辞典編集委員会の小松久男さんは「10年前に企画されて、ようやく今年出版に至りました。紛争とかテロということで語られることが多いのですが、イスラム世界の歴史や文化は大変豊かで、地球のそこかしこに生き生きとした生活があります。イスラム世界の全体像を読者の皆様にお伝えしようとチームを組みました。約4500項目を編集委員で逐一討議しながら

自然科学部門は「言語の脳科学」―脳はどのようにこと